九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福田良輔編「九州の萬葉」

橘，英哲

https://doi.org/10.15017/12236

出版情報：語文研究. 25, pp.61-62, 1968-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

福田良輔編

『九州の萬葉』

橘　英哲

福田良輔先生をはじめ、中原勇夫・春日和男・瀬古確・鶴久、各先生方の著になる一書、題して「九州の万葉」、サブタイトルに「ふるさとの文学とたび」とあり、さらにカバーの帯には「万葉の国筑紫」と記されている。九州が大和地方に次ぐ万葉の重要な地域であることは論を俟たない。しかし、「文学とたび」というほどに、学的に考証が詳細であり、しかも、読者の旅にもガイドの役を果たすという書はまだ見ない。その意味でこの書は、いささかでも九州の万葉の跡に興味を抱く人にとって、願ってもない好著であるといえよう。あるいは、これから万葉集をひもとき、九州の万葉に思いをめぐらそうとする人にとって、この上ない入門書でもあろう。

内容は1の「大宰府を中心に」からはじまり、以下「博多湾を中心に」「松浦・壱岐・対馬・五島」「肥前から肥後路へ」「北九州から豊前・豊後路へ」「日向路」の六地方に大きく分けられ、九州の万葉遺跡の殆んどが取り上げられている。そして、その土地毎に代表歌を一首、冒頭にかかげ、それに因む古蹟について、かなり詳しい説明がなされている。その説明も、序文に「九州地方で詠まれた歌の中で、万葉びとの生活や感情を感じとり、万葉集一般の理解へ導くのに適切な歌を選んで、趣味と教養とを兼ねた文学散歩的な記事にしたい。したがって、なるべく詠まれた万葉歌の古蹟にのぞみ、風土に接し風物をながめ、思いを万葉時代に馳せて、それぞれの作者の人間像を把握することが肝要である」と書かれているように、実際の探訪にもとづく記事であり、しかも、それは歩いたり、船にのったり、あるいは飛行機であったりで、その意味でも、我々読者を今も残る万葉の跡に、快く誘ってくれるのである。さらにこの書の価値は、その探訪が単なるガイドのためなのではなく、その結果、その土地〳〵の考証をより的確にするためのものであるということであろう。たとえば「可也山」の文中、引津の亭の場所を定める個所P125、また「也良の埼守」の中の「おりから朝鮮水域から帰って来たらしい漁船が白い水尾を描きながら少し東に旋回しつつ湾口にかかる。「たみて漕ぎ来」とはまさにこれではないか。（P112）と述べる一文、さらに続いて烽火台の場所を推量するくだりなど、例をあげればきりはないが実地探訪の面白さがうかがい知れるのである。

一般の人にとりつきやすいように、理解してもらえるようにと意図されたものであることは、序文に述べられている。しかし決して俗的な書ではない。前述したように、考証は緻密であ

り、学的な水準は高く保たれている。「岡の水門」の文で「ひかた」の語の考証から、宗像地方に栄えた出雲系の豪族、胸形氏、その関係から、「ひかた」という古語が、現在の方言中に残存し、現在の分布区域が、出雲族の根拠地を中心として、ある程度、その勢力範囲と一致し、史実を反映していることは、方言の一つの語も軽視できないことを痛感するのである。」（P239）と述べられる福田先生のお言葉など、何よりもそうした本書の性格を表わしているといえよう。こういうといかにも堅いとりつきにくいもののように思えてくるが、「冬の淡陽にかげる名児山を望んだとき、万葉時代の貴族の未だ容姿ともに衰えない四十近くの才媛が、ハイ・テイーンの頃から経験したさまざまの恋の思い出を胸に懐きながら、名児山を越えてゆく姿を、いつしか思い描いていたのである」（名児山 P141）などという甘い詩情のうかがえる文にも富み、気軽に読むための配慮もなされていて楽しい。もう一つ楽しさといえば、写真や図の豊富なことであろう。特に写真は、福田先生御自身の撮影も相当数であると聞く。また整理などにもみずからあたられた由、内容ゆたかな本書に、さらに花をそえる出来栄えである。ただこれはあくまで印刷・発行の責任であるが、印刷がやや不鮮明であったり、装幀がやや手軽であったのは、本書の内容が良いものであるだけに惜しまれることである。

以上、大変気ままに記させていただいたが、的はずれな、また舌足らずな点については、一般の人を主な対象として成った本書を、一般の読者として紹介する任にあたった私の不勉強のゆえである。先生方の御寛怒を乞うしだいである。

本書は、昭和三十七年、一年間にわたり、西日本新聞に連載された「ふるさとの万葉」を新に増補訂正して一書とされたもの。なお本文所出の歌はすべて訓み下し文であるが、その白文歌が、別冊で付録とされている。

（昭和四十二年六月、桜楓社刊。六八〇円）